

優れたサッカー指導者の指導哲学の形成と変遷

—大学サッカー監督を対象とした事例研究—

コーチング科学研究領域

5020A067-9 矢野間 大典

研究指導教員：堀野 博幸 教授

I. 背景

優れた指導者にはどのようにしてなるのか、この話題について多くのスポーツ指導者が興味を持つであろう。スポーツの指導に関する指導者の考え方は「指導哲学」と呼ばれ（児玉ら、1995）、吉井（1986）は、その指導哲学について「指導に成功するため不可欠なものである」と述べている。指導者の指導哲学は指導者の行動に大きく起因し、そのことが選手のパフォーマンスや行動を左右し、重要であるといえる（Horn, 2008）。

スポーツ指導者の指導哲学に関する研究において、北村ら（2005）は、「熟達化」、「意識化」、「支援」の3つの要素をあげていた。Benni et al. (2010) は「選手の育成」、「人間教育」、「勝利にこだわりすぎない」の3つの要素をあげていた。また、スポーツ指導者の指導哲学の形成に関する研究において、澁澤ら（2015）は、「モデル」、「経験」、「個人要因」、「環境要因」の4つの要因を挙げている。R. L. Jones et al. (2003) は、「指導経験」、「コーチ資格」、選手時代も含む「他の指導者の観察」、「他者からのフィードバック」の4つ要因を挙げている。これまで、指導哲学の形成に影響を与えた要因に関する研究は行われてきた。しかし、これらは現在の指導哲学や考えであり、指導経験を経ていく中での指導哲学の変遷過程は明らかになっていない。それらを明らかにするため、質的研究方法を用いる。

本研究の目的は、日本における優れた大学サッカー指導者の指導哲学がどのように変化して、現在の指導哲学に至ったのかその変遷過程を、質的研究方法で事例的に明らかにすることである。これにより、指導者育成の一助になると考えられる。

II. 方法

本研究の対象者の条件として、Côté et al. (1995) による優れた指導者の3条件を参考にし、大学サッカーでの実績や指導実績、選手育成の観点から(1)～(5)の条件すべてを満たす、大学サッカー指導者X氏を対象とした。

(1)大学サッカーで10年以上の監督歴、(2)年代別日本代表監督を務めた実績、(3)全国大会レベルの大会でベスト4を5回以上の実績、(4)複数年に渡り継続的に、毎年Jリーグに選手を輩出した実績、(5)過去にW杯もしくはオリンピック出場選手を輩出した実績。

研究方法は、1対1の対面でライフストーリーインタビュー法を用いて実施した。ライフストーリーインタビューは、質的研究方法の1つで、人生の変化の過程を描くことができ、経験の影響や意味を探ることができる方法であり（塚田、2008）、本研究の目的と合致している。インタビューは計7回行い、合わせて8時間25分となった。

分析方法として、まず指導哲学の変化があった時期・出来事ごとに、指導者I期、指導者II期、指導者III期、指導者IV期、指導者V期、の5つに区分した。区分した5つの時期ごとにそれぞれテーマ分析を行い、指導哲学を抽出した。

III. 結果及び考察

インタビューデータから383の意味単位が得られ、その中から「指導哲学」と「指導哲学の形成・変遷」の2つに該当すると思われるものを抽出し、最終的に112の意味単位を本研究の分析対象とした。指導者I～V期の指導哲学を図式化したものを図1に示す。

1. 「自身の評価を追及」から「選手の成長を追及」への発展

X氏は選手期の成功体験から、指導者としても成功したいという欲求から、指導者I～III期まで「自身の評価を追及」していた。そのため、管理的な指導をしていた。その後大学サッカーリーグで初優勝することができた。しかし、選手はサッカー面しか評価されていなかった。人として素晴らしくなることも求められ、指導者IV期で選手のサッカー以外での「選手の成長を追及」に至った。また、優勝という目標を達成したことで自己評価が高まり、自分から他者である選手に焦点が変わり、「選手の成長を追及」への発展に至った。しかし、指導者IV期以降にも「自身の評価を追及」があることが示唆され、完全に変遷したのではなく、「選手の成長を追及」する考えも新たに加わった。

2. 「ルールを守れる人間の育成」から「土台作りの重要性」の変遷・内包

X氏は指導者I期で、サッカーの技術や戦術よりも人間育成を重視しており、選手のサッカーに取り組む姿勢や意識などを含めた、「ルールを守れる人間の育成」を行っていた。しかし、その後指導者III期において、リーグ戦0勝という結果に終わり、姿勢や意識だけでなく、日常生活からの変化の重

要性を痛感したことから、栄養や休養、環境設備といった「土台作りの重要性」への変遷に至った。土台作りの取り組みとして、寮を建設したことで黄金期を迎えることができた。

3. 「一方向な指導」から「選手と同等の立場で向き合う」への変遷

指導者Ⅰ期において、当時の生徒や他の教員の影響から、指導者の権威を示すや体罰といった「一方向な指導」を行っていた。指導対象が社会人になり、関わりの中で「一方向な指導」ではうまくいかず、自身の指導方法への限界を感じ、向き合うことや双方向の関わり合いといった「選手と同等の立場で向き合う」へ変遷した。その後、指導対象が社会人から大学生になり、初めは学生の意見も尊重していたが、結果がなかなか出ず、「一方向な指導」の回帰がみられた。また、指導者Ⅲ期に形成された「土台作りの重要性」を補助する手段として、「一方向な指導」に至ったと考えられる。しかし、その後 X 氏とは競技も指導年代も異なる運動

部活動で、体罰が原因となって生徒が自殺してしまった事件であった。その事件が転機となり、自身の指導方法を振り返り、「言葉で選手を指導」への変遷に至った。

IV. 結論

本研究の結果、X 氏の現在の指導哲学には、「選手の評価を追求」、「土台作りの重要性」、「言葉で選手を指導」、「サッカーは型にはめない」の4つの指導哲学が明らかになった。その形成には、「選手としての経験」、「指導経験」、「自身のサッカーに対する価値観」など、様々な要因が絡みあっていることが明らかになった。X 氏は、指導哲学の変容過程において、指導現場で起こった転機や指導経験に対して、常に自身自身で考え、答えを見つけ出すようにしていた。このことは、本研究で明らかになった指導哲学を正解とするのではなく、この指導哲学に至るまでに、常に試行錯誤しながら、取り組むことの重要性があるといえる。

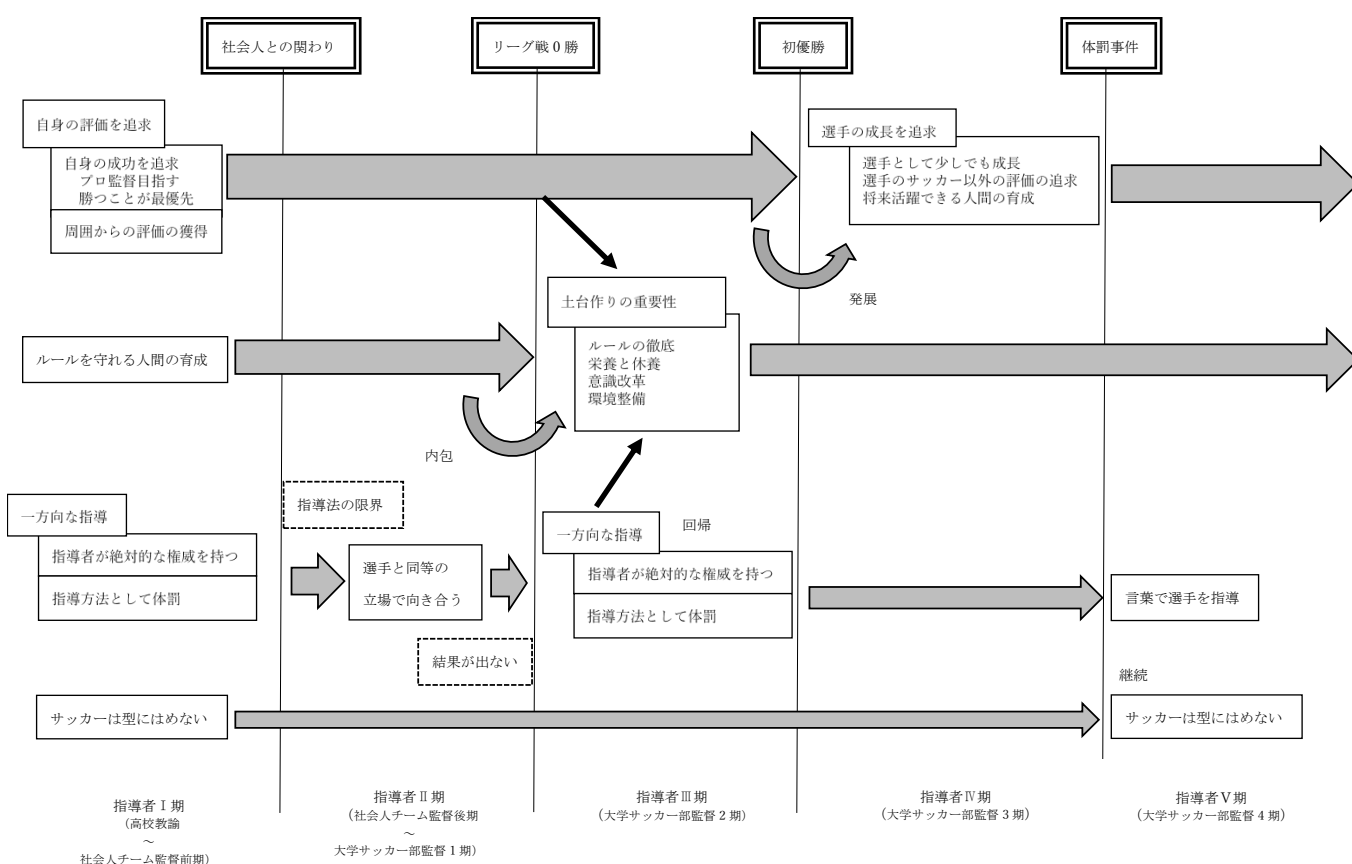


図1 X氏の指導哲学とその変遷